

ホワイトヘッドにおける神と世界

杉 村 暢 一

(教育学部哲学研究室)

(God and the World in Whitehead)

Nobuichi Sugimura

生成流転の時間的な現実性と不変不動の無時間的な非現実性とを媒介する者、これがホワイトヘッドの想定する神である。しかも神自身は“actual entity”（現実的存在者）であり、決して両者の中間に位置するが如き第三の性質を有する者ではない。現実と非現実とは相互に排他的な矛盾概念であるところから見て、神に第三の性質を帰属せしめ得ないことは当然であろう。ただしこれは誠に理解しがたきことではあるが、相互に矛盾すると見られる無時間性と現実性とがともに神に付与される。また媒介者としての神は超越的な意味でのいわゆる創造主ではなく、それ自身は宇宙に漲るエネルギーとしての普遍的な創造力(creativity)の産み出した最初の被造物である。この創造力一般も、たとえ個別化以前の段階であろうと、それがエネルギーとしてあるかぎり、やはりある意味において現実性一般に属するものであろう。かくして広義の現実的な存在の中には、世界における時間的な個々の事件(event, occasion)と神、そしてこれらを産み出すエネルギーとしての創造力とが挙げられ、無時間的な非現実性には、「永遠なる対象」(eternal object)と呼ばれるイデア的な存在が当てられる。イデアとしての永遠なる対象、創造力、事件、神、この四者はいずれか一つに還元出来ない独自の根本要素であるとともに、それらは相互の関連の中でのみ、ともにあい扶けて現実の宇宙全体を構成し得るのである。このようにホワイトヘッドの宇宙論は一つの要素の独裁を許さない多権分立の多元論ではあるが、それぞれは他の力を借りなければ、それ自身の現実上の存在も不可能とみなされる点、あくまでも要素の要素たる所以が顧慮されているのである。たとえば神もお万能ではない。すなわちキリスト教的な一神教におけるが如き超越的な意味での宇宙の創造主でもなく、またヘーゲルの絶対的精神の哲学におけるが如く、森羅万象の一切がその自己顕現、他在であるが如き絶対的な一者でもない。それにもかかわらずこれら諸要素のいずれか一つに立脚点を求めるときは、その選ばれた側面が宇宙の構成に主導的な役割を果すかのような観を呈することであろう。固定的な実体化を避けるかぎり、分析のための方法論の上ではやむを得ないことである。

ホワイトヘッドが「有機体の哲学」と自称するこの宇宙論において、現実性(actuality)の根源をなす「究極的なものは創造力と名づけられる。⁽¹⁾」「創造力とはアリストテレスの“matter”や現代の“neutral stuff”(中性的質料)の別名である。⁽²⁾」それは完全に混沌たる衝動であり、「現実性の根底における最高度の普遍性⁽³⁾」であり、したがって「性格について名状しがたき⁽⁴⁾」ものである。しかし現実の世界においては「創造力は常にもろもろの制限のもとに見出され、条件づけられたものとして記述される。⁽⁵⁾」普遍的な創造力は万物も神もそれに依って始めて現実的な存在者となり得るためのエネルギー的根源ではあるが、逆に創造力はこれらの現実的な存在者に依って具体化され個別化されて始めて、この世界において実現されるのである。もし創造力を本質的なものであるとみなすならば、神はいわばその「原初的、無時間的な偶有的出来事である⁽⁶⁾」が、他面まさにこの神という偶有的出来事は、創造力の実現過程における最初の貴重なチャンスであり、このチャンスに依って始めてこの過程そのものが可能となるのである。この点創造力と神とは

相互に限定しながら自己を実現する。神のみならず他のすべての「個別的な現実的存在者はこの普遍的な創造力の被造物である⁽⁷⁾」が、創造力が創造主であるのは「それ自身が被造物を創造する超越的な現実性であるという意味において⁽⁸⁾」ではなく、「究極的なもの、創造力が自らを個別的な被造物の中において個別化するという意味において⁽⁹⁾」である。「創造力は分化と統一へ向っての衝動である。すなわち自らをその被造物と呼ばれる多数の現実性へと個別化し、更にまたこれらの被造物が新しい諸統一へと成長し集結して行くことへの衝動である。⁽¹⁰⁾」

ところで以上述べたように「神は創造力の最初の事例化であり、⁽¹¹⁾」「他の如何なる現実的存在者とも同様一箇の現実的存在者ではあるが、さりとて時間の中にあるのではない。神の出現の時間的前後について語るならば、それは誤解を招くことになる。ホワイトヘッドにとって、神は説明が神の性質以上に遡り得ないという意味において、究極的な非合理性である。⁽¹²⁾」神が現実的存在者であり、しかも最初のそれであるとされながら、神の出現の時間的關係が不問に付せられ、この存在があたかも非歴史的、無時間的であるかの如く扱われることには異論が起り得るであろう。さればこそ Leclerc も「ホワイトヘッドがなすように、時間的な現実的存在者と無時間的な現実的存在者について語るよりも、通常の現実的存在者とユニークな現実的存在者について語る方が一層好ましいように思われる⁽¹³⁾」と言っている。ともかく創造力も神もそれぞれの意味において究極的な非合理性といわなければならない。

創造力の分化によって宇宙はそれ自身の内部において無数の視点に分裂する。ここに分離的な多数が発生する。しかるに分裂は創造力の消極的な一面であり、積極的な他面としての結合、統一への前提に過ぎない。創造力の創造力としての名に価する所以は、むしろこの積極的な側面にある。まさに「創造力は、それによって分離的に宇宙であるところの多数の者が、結合的に宇宙であるところの一箇の現実的な事件 (actual occasion) となるところの究極的な原理である。多数の者が複合的な統一の中に入り来るということは自然の道理である。⁽¹⁴⁾」「一つの現実的な事件は、それが統一する多数の中の如何なる存在者とも異なった新しい存在者である。このようにして創造力は分離的に宇宙であるところの多数者の内容の中に新しさを導入する。⁽¹⁵⁾」すなわち創造力によって宇宙は新しい高い次元に達するのである。宇宙の中におけるこの新しい集合性 (togetherness) は「癒合 (concrecence) とも呼ばれる。「現実的な世界は進展のプロセスであり、このプロセスはまたもろもろの現実的存在者がそれ自身に成ることである。⁽¹⁶⁾」進展のプロセスは宇宙全体のマクロの立場からと、その構成メンバーである現実的な事件、すなわち個々の現実的存在者のミクロの立場からの二重性において考察されなければならない。ホワイトヘッドにおける宇宙の進展は週期的プロセスであり、このプロセスの週期的完了の最小単位が現実的存在者のプロセス全体である。「かかる原子化は「時間の週期理論」(epochal theory of time) という特殊な形態を取る。⁽¹⁷⁾」ミクロ的宇宙としての現実的存在者はそれ自身で完結した個体であるとともに、他者と交換不可能な唯一の主体的存在者である。「ヘーゲルの有機的な哲学においては、普遍的な内面的関係の概念は、一者が単に見せかけにおいてのみ多数者となるということを意味しているものとしてとらえられている⁽¹⁸⁾」のであるが、ホワイトヘッドの哲学においては、全体の構成員である各部分としての「現実的存在者もまためいめいの私的にしてユニークな側面を有しているのである。⁽¹⁹⁾」部分としての現実的存在者は単なる現象ではなく内面的な組織として実在している。この自己自身の組織の中に、世界の残りの部分はこの組織の特有な方法によって組み入れられ統一される。すなわち世界全体はその各部分である現実的存在者の中に、それぞれの様式によって含蓄 (prehend) されるのである。⁽²⁰⁾「含蓄 (prehension)こそは現実的存在者の本質的な実質である。もっとも含蓄は積極的と消極的の二種類に分けられる。ただしこのことは一つの含蓄という事実の両面を意味するに過ぎない。現実的存在者の中で実質的に完全なる含蓄をおこなうものは神のみである。一般の現

実的存在者においては、それ自身の立脚点、すなわち観点から見られた現実的世界 (actual world) のある部分が選び取られ、他の部分は排除される。選択の裏面は排除である。かくして当該現実的存在者の内面的実質の実現はそれの制限と相表裏する。限定は同時に否定である。このように自己自身の性質の形成において、他の現実的存在者のある局面や部分を摂取同化する作用は「積極的含蓄」(positive prehension) であるが、排除をおこなう「消極的含蓄」(negative prehension) も宇宙における他の各部分との一定の連帯から免れるものではない。ある部分の摂取同化を拒否することは、なおある意味で何等かの連帯を前提とするのである。以上の理由から排除もなお広義の含蓄を意味し、両種の含蓄は有限なる現実的存在者の作用において不可分の関係にあるのである。実質的には不完全な含蓄も、形式的には——時間の関係を度外視するかぎり——宇宙全体を蔽い尽していると言えよう。しかしホワイトヘッドは狭義の含蓄である積極的含蓄を特に“feeling” (感ずること) と呼んでいる。⁽²¹⁾

現実的存在者の内容はプロセスでありフィーリングである。「現実的存在者は世界がそこから成り立っている究極的な実在的事物である。現実的存在者の背後に、一層実在的な如何なる物も見出すことは出来ない。⁽²²⁾」ここでいう実在的事物とは決して現象の背後に横たわる「物それ自体」の如き実体を意味するのではない。恒常的な物質、物体としてのいわゆる事物ではない。むしろそれはプロセスであり作用である。ここでは実体概念は破壊されなければならない。かの究極的な創造力も実体化されてはならない。あくまでも現実的存在者としてのプロセスにおける相対的な関係の中でのみ現実化されるのである。ホワイトヘッドは既述の如く現実的存在者としてのプロセス、作用をフィーリングとして性格づけたが、またこれを“experience” (経験) と呼ぶこともある。彼にとって現実的存在者は客観的な事件であるとともに、また他面主観的、主体的な事件でもあることが忘れられてはならない。「それぞれの現実的存在者は材料から生ずる経験の作用と考えられる。それは一つの個体的な満足の一の中へと吸収するため、多くのデータを感じるこのプロセスである。⁽²³⁾」「それぞれの経験は一つの新しい統一の中へと引き集められた多数者である。⁽²⁴⁾」「おのおの個体的な癒合はそれの世界の残りの部分を感じることから生ずるが、それ自身、自らのユニークな性質と価値とを帯びた一つの新しい癒合である。⁽²⁵⁾」全体のみが実在するもの、真なるもの、あるいは価値を有する目的であるのではなく、全体へ向って辿り行くプロセスの各部分がまず先行的な実在であり、それ自身犯すことの出来ない存在理由や存在の権利、そして他の何ものにも代えがたき固有な価値を有しているのである。「現実的存在者は、世界の残りの部分に依って提示されたデータの組織化と、自らの主観的目的に従うこれらのデータの自己への摂取同化を通じてなされる自己形成のプロセスである。⁽²⁶⁾」現実的存在者はこのように主観的直接性に満ち溢れている。現実に存在するものは経験そのものである。経験の背後にそれ自体は空虚な実体が存するのではない。経験される実体が存しないだけでなく、経験する当該実体も存しない。経験される何かも、経験する何かも存するのではなく、ただ経験することそれ自体が現実的存在者である。経験は経験する者無き経験である。経験する主体を経験作用から切り離して実体化することは悪しき抽象である。⁽²⁷⁾ 経験する者ありて、それが経験するのではなく、経験する作用ありて、始めて経験作用の主体が考えられるのである。ホワイトヘッドの有機体の哲学は、この点唯物論的な思考方法にはなじまないであろう。さればとてそれは単なる感覚主義ではない。現実的存在者としての経験は単なる与えられた断片的事実としての感覚ではなく、自発的な作用であるからである。作用の主体は作用の積み重ねを通じて成長し成立する。この側面から見るかぎり、主体が作用を産み出すのではなく、むしろ作用が主体を形成して行くのである。すなわち「事物の当該存在は、この事物が癒合しつつ成り行くそのプロセスに存する。新しき統一への成長に存する。⁽²⁸⁾」「現実的存在者が如何にして成るかということが、それが何であるかということを決定するのである。⁽²⁹⁾」

ホワイトヘッドは彼の哲学の独特の用語として“superject”という語を用いる。“subject”が「下に置く」、すなわち経験作用の基体として、その基礎、根底に在るものの意味での主観もしくは主体であるのに対し、“superject”は「上に置く」、すなわち経験作用を積み重ねた結果、その上に出来上がった現実的な存在者としての主観もしくは主体である。いわば一つの完結したプロセスとしての現実的存在者において、subject が動力因であるとすれば、superject は実現された実質的な成果であるとみなされる。しかるにホワイトヘッドに依れば、プロセスの実現されるべき目標はこのプロセスの出発点においてすでに内在的に存在し、このプロセスそのものを可能ならしめているのである。すなわち目標はプロセスの起動力として機能することになる。現実的存在者においては、動力と目標とは一にして二ならざるもの、分離不可能なものである。「一箇の現実的存在者は経験する subject であるとともに同時にその諸経験の superject である。⁽³⁰⁾」したがって彼は subject と superject とは同一のものであるという意味において、現実的存在者の主観もしくは主体を“subject-superject”とも呼ぶ。否、「subject は常に subject-superject の省略と解され得るのである。⁽³¹⁾」この見解はまさにアリストテレスの「内在的形相」の説を思わしめるものがある。プロセスのかかる内在的な目標は“final cause”（目的因）と称し得るであろう。「もろもろの feeling はそれらの目的因としての feeler を目指している。⁽³²⁾」すなわち「それらの主観を目指している。⁽³³⁾」「目的因はかのフィーリングの統一を構成するフィーリングの中なる固有の要素である。現実的存在者は、自ら現にそれであるこの現実的存在者になるためかくするが如くに感ずるのである⁽³⁴⁾」が「明かにこのことは、現実的存在者を一つの週期的な全体、実際は分割されていない全体であると考えることによってのみ可能である。⁽³⁵⁾」「このプロセスは一つの週期的統一としての subject-superject の生成である。⁽³⁶⁾」プロセスの始めから終わりまで同一の統一が支配する。統一はプロセスの根源であるとともに目標であり、かつ成果である。このプロセスは「あてども無き」悪無限ではなく、完結せる少くとも完結を目指してのプロセスである。「現実性とは具体的な統一への癒合の過程における、主観的統一を有する諸含蓄の総体である。⁽³⁷⁾」

さてカントにおける先験的主観性は、意識作用の根源的な統一点としての統覚を意味する。すなわち一切の対象、現象の先験的な制約であり、かかる意味において subject（基底に存するもの）である。したがって先験的主観性は、経験的な認識作用のプロセスを先験的に支配し、それ自身は経験から超然として、経験に依って歴史的に培養されることはあり得ない。「カントにとって（現象としての）世界は主観から出現するのであるが、有機体の哲学にとっては、主観が、いやむしろ subject よりも superject が（現実としての）世界から出現するのである。⁽³⁸⁾」この点ホワイトヘッドの有機体の哲学には存在論的性格が濃厚である。現実的存在者は世界の他の部分を自己の中に写し出す主観的な存在であるが、それ自体は世界を反映するものとして世界に同質化し、世界の所産となり、世界と一体となる。ここでは主観と客観、私性と公性との「二分岐説」は排除される。⁽³⁹⁾ 客観は主観に含蓄されて主観の一部となり、その主観は更に他の主観に対して客観となる。主観と客観、私性と公性との間には絶対的な断絶は存しない。有機体の哲学には、実存の深み、そして深みを通じての超越者との対決の如きムードは感じられない。しかるに現実的存在者が、主観性、主体性として現時点において生きているかぎり、その存在は決して公性としての世界の側から一方的に決定されるのではない。むしろある意味において、各現実的存在者はそれぞれの立脚点において、世界の進展の尖端として世界の在り方を規定する。それはそれぞれの位置において世界の運命を左右し、その代表者となる。この側面から見ると個々の現実的存在者は、世界のいわゆる「能産点」(erzeugender Punkt)であろう。実に「現実的存在者は causa sui である。⁽⁴⁰⁾」ここに決定論と自由論とを止揚しようとのホワイトヘッドの意図が窺える。

さて causa sui として自己形成へと乗り出す現実的存在者は、自己の中に“subjective aim”

(主観的目的)を含む。「主観的目的とは一つの現実的存在者の癒合の目的因である。(41)」すでに述べたようにアリストテレスの内在的形相の如きものである。「それはある一つの現実的存在者の結末、もしくは理想であるが、その現実的存在者の癒合が完了するまでは、その中にはいまだ充分には現前してはいない。それはその現実的存在者のもろもろのフィーリングを現在の如くあらしめるところのものであるが、しかもそれ自身、その現実的存在者の組織の中における一つのフィーリングである。結局ある場合にはフィーリングとして記述され、またある場合には感じられたる理想として記述される。(42)」すなわち subjective aim はいまだ実現されない目標、志向されたる対象とみなされる場合と、その目標なり対象を狙い求める志向作用と解される場合があるのである。狙われた目標、志向された対象とみなされる場合も、最初からその輪郭、イメージが確定されているわけではない。志向作用としての subjective aim はまず一定の方向性のもとに漠然とした対象性に向って暗中摸索する。「主観的目的は一定の与えられた理想の受容と同一視さるべきではなく、むしろその理想の前進的にして自由なる選択作用とみなさるべきである。(43)」暗中摸索のプロセスの中から、目標、理想とすべきイメージが次第に固まって来るのである。何故ならば「一度受容された理想は強制的である(44)」のであるが、ホワイトヘッドは出来るかぎり、対象を志向する作用に自主性を要求しているからである。作用の在り方の決定権を一方的に対象の側に帰せしめるのではなく、作用の側の自主的な自己決定性が認められる。したがって対象も受動的に作用に依って単に狙われるだけでなく、むしろ作用の自発性に対して挑発を試みる一種の“Lure”(誘惑)と考えられる。まさに主観的目的が動力因ではなく目的因である所以である。また「フィーリングのための誘惑は当該主観の癒合の段階に応じて発展する。(45)」「結局癒合のプロセスは、フィーリングのための何等かの誘惑がそれに依って効力へと認められるための決定に対して責任を負うのである。(46)」ところで一つの現実的存在者は自己の可能性を完全に発揮し実現することによって満足に到達する。現実的存在者の本質である含蓄もしくはフィーリングの作用は、実にこの満足を求めての成長であり自発的行為である。満足に到達するや、この連続的発展的な行為は完結し、それとともに主体的な生命としての直接性を失う。狭義においてはそれはもはや現実的存在者ではなくなるのである。「満足とは現実的存在者が自己の創造的衝動を満たした状態である。(47)」この満足に達するためには多数の段階を経過しなければならない。また各段階においては幾多の作用が実施される。これらの諸作用はそれぞれの“subjective form”(主観的形式)を有する。主観的形式とは「主観がデータを含蓄する様式(48)」であり、作用ごとに異なっている。また各作用は不完全な統一を保っている。かかる「主観的形式は一層進んだ積み重ね(integration)の段階における主観的目的に依って限定されており、かくして遂に完成した主観の満足を獲得するに至るのである。(49)」一方これと平行してプロセスの進展の結果、「不完全な主観的統一を保つ多くの諸作用は、満足と名づけられる完全に統一された一箇の全体的作用の状態の中に終結する。(50)」完全な統一に至るまでの各作用は相互に依存し合っているのであるが、「これら諸作用の主観的形式相互間の関係は、これら諸作用の形成を導く一つの主観的目的に依って構成される。(51)」「superject は各フィーリングが如何にそのプロセスを展開するかを規定する条件としてすでに現前しているのである。(52)」主観的目的を志向作用として見るとき、それは現実的存在者自身の完成へ向ってのプロセスの成分であるもろもろのフィーリングの中の一つであるが、他の幾多のフィーリングを統制し統一する基礎的な、その意味でユニークなフィーリングである。この基礎的な根本的なフィーリングを欠くならば、他のもろもろのフィーリングは全体的に統一された一つのプロセスの構成要素とはなり得ないであろう。しかしこのユニークなフィーリングは他のフィーリングから区別され分離されて、特別な目標を単独に狙うのではなく、いわば他のすべてのフィーリングの中に滲透して行って、これらのフィーリングの共通の方向づけの制約となるのである。ユニークなフィーリングの孤立化は、た

だ方法論的分析の中でのみ意味を持つであろう。(53)

現実的存在者は最初、自己創造、自己形成のための自由の火を神に依って点火される。それは最初から主観的目的を持っていたのではない。「この意味において神は具体化もしくは凝結の原理である。すなわち神は各時間的癒合が、その自己因果性がそこから出発するかの最初の目的をそこから受け取るべきかの現実的存在者なのである。(54)」現実的存在者における自己形成のための自由は、神からの贈り物である。自由は無制限の自由ではなく、一定の方向づけによって枠づけられている。各現実的存在者にはそれぞれに固有な主観的目的が与えられるのである。では如何なる方法によっておこなわれるのであろうか。現実的存在者は空間的時間的に、それぞれ特定の異なった位置を占有する。そしてそれぞれの位置から角度から、同一の神というユニークな現実的存在者を含蓄する。神の含蓄のされ方は、神と当該現実的存在者との空間的時間的な配置関係によって機械的に決定されるであろう。このようにして含蓄された神の“perspective”(配景)が、神から贈与された当該現実的存在者の最初の主観的目的を規定するのである。神は他者によって含蓄されるということを通じて、他者に影響を及ぼすのである。

ところで含蓄もしくは、フィーリングの作用を二種の性質に大別することが出来る。すなわち、“physical prehension”(物質的含蓄)と“conceptual prehension”(概念的含蓄)である。またこれに対応して、現実的存在者の内的構造においてそれぞれ“physical pole”(物質的極)と、“mental pole”(精神的極)とが認められる。「現実的存在者を含蓄することは物質的含蓄と名づけられ、永遠なる対象を含蓄することは概念的含蓄と呼ばれる。(55)」物質的極は物質的フィーリングをおこなう側面であり、精神的極は概念的フィーリングの機能を掌る側面である。ホワイトヘッドに従えば、「この両側面の相対的な重要性はそれぞれの現実的存在者によって相異するとはいえ、いずれかの側面を欠く現実的存在者は存在しないのである。(56)」[かくして現実的存在者は本質的に両極的であり、物質的世界ですら他の側面に関連することなくしては正当に理解され得ないのである。(57)] もっとも「概念的フィーリングは必ずしも意識を含んでいるとはかぎらない。とはいえ総合における要素としての概念的フィーリングを含まないような意識的フィーリングもあり得ない。(58)」いわゆる意識現象は精神的極の高度な発達段階であり、意識的なものであれ無意識的なものであれ、すべての現実的存在者に対して、必須の要素としての精神的側面を認めるころ、一種の万有心論とみなすことが出来よう。一方神以外の現実的存在者は最初から直接、純粋に永遠なる対象を直観することは出来ない。まず最初は単純な物質的フィーリングが発生する。このように現実的存在者においては、初期の段階では物質的機能の性格が濃厚である。したがって物質的極も欠くべからざる要素である。「精神的極は物質的極における作用の概念的対応者として始まる。両極はそれらの起源において分離不可能なものである。精神的極は物質的極の概念的記録とともに始まるのである。(59)」現実的存在者相互間の含蓄は、まずいわば物理的な因果関係の如きものとして出発する。しかしこの物理的な作用の中に極めて微弱ながらすでに精神的作用が胎動していることが見逃されてはならないであろう。かくして物質的フィーリングは現実的存在者における自己形成に向っての含蓄の作用に先導的なチャンスを与えるに過ぎない。含蓄する側であれ、される側であれ、現実的存在者が一箇の個体としての限定性、客観性を獲得するためには概念的含蓄の機能を俟たなければならない。

さて単純な物質的フィーリングは更に「“pure physical feeling”(純粋な物質的フィーリング)と“hybrid physical feeling”(混成的な物質的フィーリング)とに分たれる。純粋な物質的フィーリングにおいては、材料である現実的存在者は、それ自身の物質的フィーリングの一つによって客観化される。(60)」それに対して「混成的な物質的フィーリングにおいては、材料を形成する現実的存在者は、それ自身の概念的フィーリングの一つによって客観化されるのである。(61)」そして神に

外の現実的存在者にとっては、概念的フィーリングはこの混成的な物質的フィーリングから導出される。まず初期の段階、単純な段階においては、フィーリングは他の現実的存在者におけるフィーリングの機械的な再生産 (reproduction) という形を取る。特に物質的フィーリングはこの単なる再生産の機能のみに制限されている。「かかるフィーリングは適合的なフィーリングであり、⁽⁶²⁾」単に受容的なものに過ぎない。純粋な物質的フィーリングは他の現実的存在者を材料として客観化するが、しかも材料となるその現実的存在者自身、物質的フィーリングの実施中という状況にあるものとして客観化されるのである。混成的な物質的フィーリングも確かに物質的フィーリングであることには変わりなく、他の現実的存在者を材料として客観化するのであるが、この場合は、材料となる現実的存在者自身は、概念的フィーリングの実施中、すなわち永遠なる対象を感じるという機能を果しつつあるという状況にあるものとして客観化されるのである。したがって混成的な物質的フィーリングにおいては、他の現実的存在者に依る概念的フィーリングを通じて、間接的に永遠なる対象が志向されているのである。すなわち他の現実的存在者に依るフィーリングが再生産されることを通じて、それとともにかのフィーリングの対象である永遠なる対象が再生産されることになる。このようにして混成的な物質的フィーリングによって伝達された永遠なる対象を、媒介手段としての他の現実的存在者に依るフィーリングや、自らに依る物質的フィーリングから取り出して、改めて新しいフィーリングに依ってこの対象が純粋に志向され確認される時、はじめて概念的フィーリングが成立するのである。⁽⁶³⁾「混成的な物質的フィーリングは“physical recognition” (物質的認知) と呼ばれるであろう。この物質的認知は概念的フィーリングの物質的基礎である。⁽⁶⁴⁾」

現実的存在者が最初神から主観的目的を付与される場合、神というユニークな現実的存在者を材料、すなわち客観化の対象とする混成的な物質的フィーリングがおこなわれる。神はその「原初的な性質」(primordial nature) においてすでに永遠なる対象を直接全面的に直観しているのであり、神のみが最初から独自に純粋な概念的フィーリングを実現し得るのである。一般の現実的存在者は特定の立脚点より混成的な物質的フィーリングを介して、神の志向する永遠なる対象の一部分を自己の中に受容し、かくして最初の概念的フィーリングが成立し、それとともに最も根源的な初期的な主観的目的が、あたかも先天的な固有性であるかの如くに付与されるのである⁽⁶⁵⁾。このようにして神から摂取された概念的内容、すなわち永遠なる対象は、まさに当該現実的存在者の主観的目的、すなわちその自己自身の最初の内容となる。自己自身の内容とは単に事物的な内容ではなく、自己自身の主体的な原動力であり、後続の段階における養分摂取のための主観的形式である。この主観的形式に従って他の現実的存在者が含蓄されることになる。神というユニークな現実的存在者を含蓄した場合と同様、純粋な物質的フィーリング、混成的な物質的フィーリング、そして概念的フィーリングといった順序に従って、更に新しい概念内容が吸収され自己自身の血となり肉となる。この場合も前段階と同様単なる物質的肥大を意味するだけではなく、自我の主体性の増大、豊富化、主観的形式の発展をも意味する。現実的存在者における自我は材料によって培われ、かくして成長した自我は材料摂取のための力となる。選択、統制の方法が複雑微妙となる。物質的フィーリングは物理的作用のように瞬間的な事件である。事件そのものは現実的存在者の養分とはなり得ない。瞬間的な事件は次の段階に向けて概念的記録の形で保存されねばならない。もし物質的フィーリングの概念的記録化がおこなわれなければ、自己同一としての現実的存在者が、物質的フィーリングを積み重ねながら自己形成を成就するということは不可能であろう。この自己形成の途上、幾つかの類似の単純な物質的フィーリングが集って、それらの共通の性質としての永遠なる対象が志向され、同一の概念的フィーリングが導出される。このようにして同一化された概念的フィーリングの故に、多数の物質的フィーリングは統一された結合体 (nexus) となる。多数者は後続の段階において新しい一者へと変質するのである。⁽⁶⁶⁾ また当初実現された概念的フィーリングが後続の段階で再生的に保存されながら、しかも主観的目的に依って部分的に変容を蒙るという事

実も見逃されてはならない。⁽⁶⁷⁾ 同一のものの成長、発展とは、変容しつつ復原することを意味するであろう。しかし主観的目的が、変容しつつ復原する概念的フィーリングのデータたる概念内容とは別に存するわけではない。概念内容が変容するということは実は主観的目的そのものの変容を意味する。能産的自然と所産的自然との関係の如く、能産的なものとして見れば主観的目的であり、所産的なものとして見れば概念内容である。主観的目的は概念内容を限定するとともに、逆に概念内容によって限定されて変容する。「それは継起的な変容の中にありながらも、その継起的な諸段階を支配する統一化的要因であり続けるのである。⁽⁶⁸⁾」「変容は分割性に関係し、そして主観的目的の統一は不可分性に関係する。⁽⁶⁹⁾」すなわち発展のプロセスを各段階に分割され得るものと考えれば、そこには変容が認められ、発展の全プロセスを不可分の統一的全体として扱うかぎり、そこには不変性が残るのである。

ところで「概念的フィーリングの主観的形式は評価という性格を有する。⁽⁷⁰⁾」何故ならば現実的存在者の自己形成は主観的目的に従っての価値の実現を意味し、しかも概念的フィーリングはこのプロセスの統一化のための要因であるからである。評価は価値実現のプロセスの現段階における諸条件、すなわち他の諸フィーリングに適切なる永遠の対象の選定に参与する。すなわち既成の結合体の中へ、それにとって最もふさわしい永遠なる対象が進入して来る。主観的目的としての永遠なる対象は物質的フィーリングを誘導統制するが、逆に先行の段階の物質的フィーリングや、それらの結合体、あるいはまた先行の段階の概念的フィーリングが、新しい概念的フィーリングのデータである永遠なる対象の進入を惹起するのである。⁽⁷¹⁾ その場合、まさに進入すべき永遠なる対象に対する積極的なフィーリングとともに、まさに進入が阻止されるべき永遠なる対象に対する消極的な含蓄が発生する。如何に遠隔な所にある現実的存在者に対しても、積極的な物質的フィーリングが間接的にはおこなわれているのであるが、概念的フィーリングの場合は、積極的な含蓄は一部のものに限定される。すなわち、積極的な含蓄の裏面には消極的な含蓄が対応するわけである。⁽⁷²⁾ また複雑なフィーリングは精神的極における概念的含蓄の統一力に起因する。しかし精神性の基礎的な作用以外のすべての精神作用は不純なものである。何故ならばこれらのものは純粋な精神性の単独の働きではなく、すでに純粋な物質的含蓄と結合せる成果であるからである。ホワイトヘッドはこれを不純な含蓄と呼ぶ。同一の不純な含蓄は不純な物質的含蓄であるとともに、また不純な概念的含蓄でもあるのである。⁽⁷³⁾ ここでホワイトヘッドの言う精神性の基礎的な作用という言葉は曖昧である。筆者は次のように思う。ここで言われる基礎的な作用としての純粋な概念的フィーリングは、神自身の原初的な性質において実施されるものや、神に対する混成的な物質的フィーリングを介して獲得された純粋な概念的フィーリングを始めとして、現実的存在者相互間のやはり混成的な物質的フィーリングから導出されたものであり、方法論的分析の中でのみ抽象化され得るいわば瞬間的な要素である。そして次の瞬間には直ちに物質的フィーリングや他の概念的フィーリングと結びついて複合的な新しい現実性、具体性の中に溶け込むことになるであろう。

一面から見ると、現実的存在者の自己形成、発展は、永遠なる対象が概念的フィーリングを通じて、現実性としての物質的フィーリング、換言すれば物質的諸事件の中に進入して来ることを意味するであろう。この“ingression”に依って物質的フィーリングそのもの、現実性そのものも何等かの限定性を獲得すると解される。ここにユニークな現実的存在者としての神の原初的な性質の場合は例外として、他のすべての現実的存在者においては、物質的フィーリングが概念的フィーリングに先行するという主張と、永遠なる対象の進入を俟って現実的な諸事件は限定性を獲得するという主張との間に矛盾が見出されるであろう。またこの事に関し、神のみを例外的に扱うことも理論の首尾一貫性を欠いていると言わなければならない。単なる物質的な素材と、その観念的な限定性といずれを先行させるべきか？あるいは同時的なものか？誠に困難な問題である。この点カン

トの認識論における感覚的な質料と、その質料に空間的時間的な限定性を付与するための先験的主観的な形式との関係における問題性と共通せるものを感じさせられる。ここにこの問題性の一つの解決方法として、材料というものを、与えられた (gegeben) ものとしてではなく、むしろ課せられた (aufgegeben) ものとして解したり、あるいは微分的な質料からの積分的産出を考える「根源の原理」(Prinzip des Ursprungs)を提唱する新カント派のコーエンの学説が想起される。これはわれわれの思惟形式の限界を暗示する哲学上の重要なアポリアの一つであろうし、したがってホワイトヘッドの矛盾のみを追求するのは苛酷であろう。

永遠なる対象が現実性の中に進入する時、それは二つの方向において機能する。すなわち一方においては、フィーリングの原因である客観的データの限定性を決定する要因として、他方においては、フィーリングの結果に属する主観的形式の限定性を決定する要因としてである。⁽⁷⁴⁾ いわばノエシスとノエマの両面に対して同一の永遠なる対象が決定の要因として働くのである。このように「永遠なる対象は主観的と客観的に分けられる。後者のみがプラトンのイデアと何等かの可能な類似性を帯び得るであろう。それは現実的存在者においてこれから実現され得る性質である。⁽⁷⁵⁾」前者はフィーリングの作用の質的な様式をもたらすのである。原初的な性質における神の場合を除いて、含蓄もしくはフィーリングは、すべて他の現実的存在者におけるフィーリングを感じずという形でおこなわれる。したがって「たとえば石を知覚する時、結局石におけるフィーリングを感じつつあると言わなければならない⁽⁷⁶⁾」のであるが、エメットはこれは驚くべきことであると言っている。⁽⁷⁷⁾ われわれが石を白いと知覚する場合、「白」という永遠なる対象を石自体がまずフィールし、この石に依るフィーリングをわれわれの主観が再生産するということになるであろうが、これでは素朴実在論の疑いが濃厚であろう。もっとも石におけるフィーリングは意識を伴う必要はない。ホワイトヘッドの用語では、フィーリングの意味は無意識的な作用にまで拡張されているからである。しかしその場合においても、「白」という永遠なる対象が石自体においてすでに実現されており、「石」の現実性を限定しているというのであるならば、これから認識さるべき対象、すなわちホワイトヘッドの用語における“initial datum”，ここでは他の現実的存在者の経験内容と、自己自身である主観としての現実的存在者における経験内容との間に、共通せる性質を要求することになるのではないか。なるほどノエシスとノエマ（すでに客観化された対象）との間に同一の永遠なる対象が機能するということは一応首肯され得るとしても、前者の場合はまさに素朴実在論たるを免れ得ないのではないか。エメットの驚きは尤もであろうし、筆者も永遠なる対象やフィーリングの作用をめぐって、ホワイトヘッドの説明に不明瞭なるものを感じざるを得ないのである。このような事態は混成的なフィーリングによって、同一の永遠なる対象が一つの現実的存在者から他の現実的存在者へと手渡されるという考えに起因するのではなからうか？ 客観的な物質的事物も主観的な経験内容もすべて世界の中なる現実性と見る点においては、存在論としての正当性を認めるのにやぶさかではないが、両者に対して同一の永遠なる対象、すなわち同一の限定要因を置くことは誠に粗笨の感に堪えないのである。勿論ホワイトヘッドは石が「白」という「永遠なる対象」をそのままフィールしていると言っているのではないかもしれない。石自体は一箇の現実的存在者ではなく、幾つかの現実的存在者、すなわち幾つかの事件の結合体であり、部分としての、構成要素としての多くの永遠なる対象の複雑な全体、あるいはその全体を一貫する一般的な性質が「白」とあるというつもりかもしれない。しかし全体化され一般化されて成立した「白い石」なる観念内容の部分は、やはり同じ観念内容の領域に留るのであるから、他者である現実的存在者から転送される永遠なる対象は、全体的な観念内容自体の部分的内容にはなり得ないであろう。少なくとも感覚の質的内容としての永遠なる対象は、部分であれ全体であれ、他の現実的存在者から転送されたものではなく、経験する主観としての当該現実的存在者自身の中において始めて実現されるものであ

ろう。概念的フィーリングのデータを感覚の質的内容としての永遠なる対象に制限しないかぎり、筆者は永遠なる対象の転送を必ずしも否定するものではないが、感覚、知覚の質的内容の発生の際には、他の現実的存在者からの転送ではなくて、むしろオリジナルな直接の概念的フィーリングが新に起されるものと思われる。ただしこの場合、プロセスの出発点における永遠なる対象の最初の導入の場合と同様、「神からの由来」ということを一応の可能性として許容することは出来よう。

現実的存在者の自己形成は物質的フィーリングと概念的フィーリングとの合作である。したがってこの成果は両種のフィーリングの統一されたる全体的な不純な複合的フィーリングとなって出現する。ホワイトヘッドはこの過程を「命題」(proposition)の構造に擬して説明する。ここで「命題」と「命題的フィーリング」という二つの用語が登場する。「命題」は客観的データ、いわばノエマであり、「命題的フィーリング」はノエシス、すなわち命題の含蓄を実施する当該現実的存在者の経験的に充実せる主観的作用である。「命題はそれをフィールする主観を待機しつつあるフィーリングのためのデータである。⁽⁷⁸⁾」また「命題的フィーリングはその客観的データが命題であるところのフィーリングである。⁽⁷⁹⁾」命題は当初単なる可能性としてのみ志向され、「フィーリングへの誘惑⁽⁸⁰⁾」に過ぎない。その時「命題はフィーリングの特殊性も結合の实在性も有してはいない。⁽⁸¹⁾」命題は非限定性という性格を永遠なる対象と共有するのである。⁽⁸²⁾」通常「命題」という時、論理的な判断内容の如きものに制限されがちであるが、ここでは感情や意志を表現するようなものも含まれている。⁽⁸³⁾」現実的存在者の自己形成に際しては、まず物質的フィーリングが命題の主語に相当するものを指示する。ついで概念的フィーリングがこの仮定的な形式的主語に対して、述語的なパターンを供給する。かくしてこの主語的な照準点は、単なる可能性としてのパターンが自らをそれにおいて具体化し実現するための資料となる。⁽⁸⁴⁾」比喩的な表現ではあるが、この時単なる可能性としての永遠なる対象は、自己充実のための食料を求めて“appetite”(食欲)を感じるのである。⁽⁸⁵⁾」そもそも命題も命題的フィーリングも同時的相互的に対応するものであるが、ホワイトヘッドはこの場合、命題に対して当初的な可能的な在り方に力点を置いており、命題的フィーリングという用語においては、命題が充実せる経験において実現された後続の状況、高次の段階の意味が優勢であるように見える。「命題的フィーリングは含蓄する主観のプロセスの後続の段階においてのみ発生することが出来る。⁽⁸⁶⁾」また「癒合におけるそれぞれの新しい段階は、フィーリングの实在的統一のなす成長し続ける把握の前で、単なる命題的統一が後退して行くことを意味する。⁽⁸⁷⁾」ここで言う「単なる命題的統一」とは「単なる可能性としての命題的統一」を意味するのである。現実的存在者の発展の出発点における漠然たる単なる可能性としての命題は、発展の各段階を経るにしたがって、少しずつ限定されながら明確な内容へと具体化されて行く。発展のプロセスを一貫して、基本的には同一の命題がノエマ面に志向されつつも、なお各段階には、その変容態としてのそれぞれの可能性としての命題が、その段階におけるフィーリングの“lure”として対応する。「相継起する各命題的局面は、その実現を促進するフィーリングの創造への誘惑である。⁽⁸⁸⁾」もし「主観的目的」という用語をノエシス面において解するならば、この作用のノエマ(客観的データ)こそここで言われている「命題」に相当するであろう。⁽⁸⁹⁾」可能的全体性としてのフィーリングと、同じく可能的全体性としてのその客観的データとが、プロセスの出発点から各段階を通じて変容されつつ存在するのであり、そしてプロセスの終着点において現実的全体性としてのフィーリングとその対象が成立するのである。物質的フィーリングや概念的フィーリングの個々のフィーリングは、命題的フィーリングが自らの中に部分として含有する単語的なフィーリングとみなすことが出来よう。しかしここでは単語と単語とが組み合わせられて始めて命題が構成されるという観点よりも、むしろ可能的全体性としての命題が現実的全体性としての命題へと限定され展開して行く中で、この全体的な流れの統制下において、個々の単語が結合されて行くという観点が前面に押し出されているであろう。個々のもの相互の結合の根底に、全体者の自己限定が

見られるのである。そして対象の側における可能的全体（可能的命題）としての「客観的誘惑」(objective lure) から作用の中に選び取られて内在化された具体的な主観的目標が、実際の主観的効果を発揮するのであり、この目標が直接自己形成のプロセスを導くのである。⁽⁹⁰⁾ このようにして一つの現実的存在者の自己形成が完了したあかつきは、その主体的な生命としての直接性は消滅し、それに代って“objective immortality”（客観的不滅性）が確保される。そしてこの客観的不滅性としての現実的存在者は、次に発生する新しい現実的存在者の中にデータとして含蓄され、このものの自己形成を助けるのである。⁽⁹¹⁾

さてホワイトヘッドに依れば「あらゆる現実的存在者に類似して、神の性質も両極的である。⁽⁹²⁾」すなわち精神的極と物質的極とを有する。そして特にユニークな現実的存在者である神の場合には、これらの極に応じてそれぞれ「原初的性質」(primordial nature) と「結果的性質」(consequent nature) とを有する。⁽⁹³⁾ 神の原初的性質は混成的な物質的フィーリングからの導出を俟たないで、直接純粋な概念的フィーリングを実施する。神のこの概念的フィーリングはまったく制限されないものであり、永遠なる対象の全領域に及ぶものである。無数の永遠なる対象は完結せる体系的全体性をもって神の原初的な心の中に積極的に含蓄される。概念的フィーリングの無限なる故に、ここには消極的含蓄は起り得ない。現実的世界における一切の秩序の根源は、神のかかる心の中に存するのである。永遠なる対象は神の中に内在化されない時は、純粋な可能性として断片的、孤立的であるが、神の中に内在化される時は、実在的な可能性(real potentiality)として制限された無限定性の領域を形成する。すなわち純粋な可能性が現実的存在者への“Relevance”（適合性）にもとづいて、それへの進入を準備する段階である。⁽⁹⁴⁾ これは純粋な永遠なる対象が現実的存在者に適用されるための図式ともみなされるであろう。「ホワイトヘッドは神のヴィジョンという言葉によって、ここでは外延的な関係性の体系的な複合に論及しつつある⁽⁹⁵⁾」のであり、この意味での神という観念は殆ど外延的図式と同じものであろうとメイズは言っている。⁽⁹⁶⁾ 「神の性質のこの側面は自由であり、完全であり、原初的であり、永遠であり、現実性を欠いており、かつ無意識的である。⁽⁹⁷⁾」原初的な性質における神はこのように非常に抽象的な存在という印象を与え、カント的な言葉で言えば、「可能的経験一般」の成立を保証するための先験的な統一性とでもいったものであろうし、またヘーゲルの立場から見れば、ロゴスの段階における an sich としての、抽象態としての神（絶対的精神）に比せられるかもしれない。しかしホワイトヘッドの哲学では、なお原初的な性質における神をもユニークな現実的存在者とみなし、純粋な可能性としての永遠なる対象と同一視することを許さないのである。

すでに述べたように神は他の現実的存在者に含蓄されることにより、それらに最初の永遠なる対象を贈与するのであるが、ホワイトヘッドの想定する「あらゆる事物の相対性の故に、神に対する世界の反作用が存する。⁽⁹⁸⁾」世界は神における物質的フィーリングのデータとなる。世界のすべては神の中に客観化される。したがって世界の中なるもろもろの現実的存在者において実現される新しい創造は、すべて神の所有に帰する。このように神は新しく生じた現実的存在者の成果を、自らにおける物質的フィーリングによって含蓄し、自己自身の内容をますます豊富にして行く。神自身も完成に向かって成長するのである。⁽⁹⁹⁾ この時、神における自己形成の作用のデータである世界は神と対立して客観的な条件となり、神の自由を制限する。事物の全面的な相対性のもとでは、ユニークな神といえども孤高を保つことが出来ないのである。神の性質のこの側面は「時間的な世界から由来せる物質的経験とともに始まり、そして次に原初的側面との統合を獲得する。この側面は限定されており、不完全であり、結果的であり、永続的(everlasting)であり、十分に現実的であり、そして意識的である。⁽¹⁰⁰⁾」神のこの側面は神の結果的性質である。それは具体的な充実せる神である。神と世界は相互に限定しながら発展する。ここに両者の弁証法的な関係が見られるであらう

う。神の原初的な性質は、可能性としての永遠なる対象と同様、時間を超越しているという意味で永遠 (eternal) であり、結果的性質は、時間の流れの中で過去を客観的不滅性として保存し蓄積するという意味で永続的 (everlasting) である。また神の原初的な性質が無意識的であるのに対し、結果的性質は意識的であるということは理解に苦しむのであるが、メイズは「ホワイトヘッドはこのことに依って、われわれが知覚において具体的な世界に意識的に気づいているということ以上のことを意味しているかどうか疑問である⁽¹⁰¹⁾」と言っている。われわれ人間の意識がそのまま、成長して具体的となった神の意識であるというのであれば、その点においては汎神論との近似性を感じさせる。

さて神は世界という土壌に「永遠なる対象」という種を蒔いてもろもろの現実的存在者を栽培する。しかし次に世界は逆にその収獲物を神に提供して神の自己形成に資するのであるが、宇宙の創造のプロセスはそこで終結するのではない。完成に向って成長して行く現段階における神自身の具体的な結果的状况は、更に世界に対して投げ返される。その時、神自身は宇宙に漲る創造力の目的を実現するための踏み台となるのである。⁽¹⁰²⁾ 「世界においてなされるところは天における実在性へと変形され、そして天におけるその実在性は世界の中へと復帰する。この相互的な関係の故に、世界における愛は天における愛へと移り、そして更に再び世界の中へと溢れ戻るのである。この意味において神は偉大なる同伴者、すなわちよろずを理解し憂を共にする同志である。⁽¹⁰³⁾」なるほどホワイトヘッドの哲学は永遠なる対象や神よりも、むしろ多数の現実的な事件を基礎的なものと考え、多元論に赴く傾向ありと見られる一面も無いわけではない。⁽¹⁰⁴⁾ それにもかかわらず『神は彼の「事件の学説」に対する単なる添え物ではなく、「事件」という観念全体にとって本質的なものである。最も微細な電子的な事件といえども、もし個別的にして特殊な限定性へ向っての目標を神から受け取っていないならば、存在は不可能であろう。⁽¹⁰⁵⁾』しかしこのことは神に依る無からの創造を意味するのではない。神のなす業 (わざ) は創造力発現の規制、秩序づけである。「神は世界を創造せず、それを救済する。あるいは更に正確に言うと、神は世界を真、美、そして善についての彼のヴィジョンによって導くやさしい忍耐力を持てる世界についての詩人である。⁽¹⁰⁶⁾」

(完)

<註の欄>

- (1) A. N. Whitehead: *Process and Reality* Fifth Printing, 1960 p. 11 (以下の略記, PR.)
- (2) *ibid.* p. 46
- (3) *ibid.* p. 47
- (4) *ibid.* p. 47
- (5) *ibid.* p. 47
- (6) *ibid.* p. 11
- (7) I. Leclerc: *Whitehead's Metaphysics* 1958 p. 87 (以下の略記, Leclerc: WM.)
- (8) *ibid.* p. 87
- (9) *ibid.* p. 87
- (10) D. Emmet: *Whitehead's Philosophy of Organism* 1966 p. 73 (以下の略記, Emmet: WPO.)
- (11) Leclerc: WM. p. 87
- (12) M. Jordan: *New Shapes of Reality* 1968 p. 136 (以下の略記, Jordan: NSR.)
- (13) Leclerc: WM. p. 193
- (14) PR. p. 31
- (15) *ibid.* p. 31
- (16) *ibid.* p. 33
- (17) *ibid.* p. 105
- (18) Emmet: WPO. p. 89
- (19) *ibid.* p. 89
- (20) *ibid.* cf. p. 89

- 21) PR. cf. p. 35 p. 65 p. 66 Emmet : WPO. cf. p. 87
- 22) PR. p. 27~p. 28
- 23) ibid. p. 65
- 24) Emmet : WPO. p. 279
- 25) ibid. p. 279
- 26) ibid. p. 114
- 27) PR. cf. p. 338
- 28) Emmet : WPO. p. 275
- 29) PR. p. 34
- 30) ibid. p. 43
- 31) ibid. p. 43
- 32) ibid. p. 339
- 33) ibid. p. 339
- 34) ibid. p. 339
- 35) Leclerc : WM. p. 173
- 36) ibid. p. 186
- 37) PR. p. 359
- 38) ibid. p. 135~p. 136
- 39) ibid. cf. p. 443
- 40) ibid. p. 339
- 41) E. Pols : Whitehead's Metaphysics 1967 p. 109 (以下の略記, Pols : WM.)
- 42) ibid. p. 109
- 43) ibid. p. 117
- 44) ibid. p. 117
- 45) PR. p. 287
- 46) ibid. p. 135
- 47) ibid. p. 335
- 48) ibid. p. 35
- 49) ibid. p. 29
- 50) ibid. p. 335
- 51) ibid. p. 359
- 52) ibid. p. 341
- 53) Pols : WM. cf. p. 109~p. 110
- 54) PR. p. 374
- 55) ibid. p. 35
- 56) ibid. p. 366
- 57) ibid. p. 366
- 58) ibid. p. 366
- 59) ibid. p. 379
- 60) ibid. p. 375
- 61) ibid. p. 376
- 62) ibid. p. 364
- 63) ibid. cf. p. 39~p. 40
- 64) ibid. p. 397
- 65) ibid. cf. p. 343
- 66) ibid. cf. p. 40
- 67) ibid. cf. p. 40
- 68) ibid. p. 343
- 69) Pols : WM. p. 106~p. 107
- 70) PR. p. 367
- 71) ibid. cf. p. 368~p. 369
- 72) ibid. cf. p. 366
- 73) ibid. cf. p. 48~p. 49
- 74) ibid. cf. p. 364
- 75) Emmet : WPO. p. 133 PR. cf. p. 446
- 76) Emmet : WPO. p. 159
- 77) ibid. cf. p. 159

- (78) PR. p. 395
- (79) *ibid.* p. 391
- (80) *ibid.* p. 37
- (81) *ibid.* p. 395
- (82) *ibid.* p. 395
- (83) *ibid.* cf. p. 37
- (84) *ibid.* cf. p. 394
- (85) *ibid.* cf. p. 47
- (86) *ibid.* p. 397
- (87) *ibid.* p. 343
- (88) *ibid.* p. 343
- (89) Pals : WM. cf. p. 110
- (90) PR. cf. p. 133
- (91) *ibid.* cf. p. 44 p. 47 p. 71 p. 89 p. 94 Leclerc : WM. cf. p. 109
- (92) PR. p. 524
- (93) *ibid.* p. 524
- (94) *ibid.* cf. p. 46 p. 73 p. 133 p. 226 p. 249 p. 287 p. 373 p. 530 Pals : WM. cf. p. 116
- (95) W. Mays : The Philosophy of Whitehead 1959 p. 60 (以下の略記, Mays : PW.)
- (96) *ibid.* cf. p. 60
- (97) PR. p. 524
- (98) *ibid.* p. 523
- (99) *ibid.* cf. p. 523
- (100) *ibid.* p. 524
- (101) Mays : PW. p. 61
- (102) PR. cf. p. 532
- (103) *ibid.* p. 532
- (104) Jordan : NSR. cf. p. 129
- (105) *ibid.* p. 133~p. 134
- (106) PR. p. 526

(昭和45年 9月16日受理)